

ピエトロ・メンゴリの音程知覚論

—科学革命期における聴覚への数学的アプローチ—

大愛崇晴

科学革命期のイタリアの数学者ピエトロ・メンゴリ (Pietro Mengoli, 1625-86) は、その著書『音楽に関する考察 *Speculationi di musica*』(1670) において、聴覚が音程を認識する唯一の主体であると主張する。この主張は、われわれには当然のように思われるが、四科 (クアドリヴィウム) の伝統に身を置いている同時代のほとんどの音楽理論家たちが、感覚によって知覚された音程の種類を正確に判断するのは理性または知性だと考えていたのだから、画期的と言える。

メンゴリの聴取に関する記述は機械論に基づいている。彼は空気を粒子状の物質と見なす。人間の魂は高音と低音から伝えられる各々の空気粒子の数を数え、これらの数の比の対数値を抽象し、最終的に音程の大きさを認識する。それら粒子の数は、理性を通してではなく、感覚のみを通して数えられる。しかし、感覚の認識能力はきわめて限定的なので、認識される音程の大きさや誤差もまた限定的となる。そこでメンゴリは、聴覚が音程を同定するために持っているべき許容度に従って、誤差を以下の3つのカテゴリーに区分する：1. 感覚に認識されない誤差、2. 感覚に認識されるが積極的に受け入れられる誤差、3. 感覚に認識され、かろうじて耐えうる誤差。

人間の魂は、1番目のカテゴリーと、2番目のカテゴリーの一部の誤差をとまなう音程に接したとき、それらの音程を、感覚が数えることができる限定された整数の比によって規定される純正な音程として受け入れる。この理論は、メンゴリが音程認識を、魂が音程をカテゴリー化することによって実行する能動的作用と見なしていることを示している。

メンゴリの音楽論は、初期近代のヨーロッパにおける聴覚についての合理主義的思潮に対する新鮮な洞察をわれわれに提供してくれる。